

## 〈新刊紹介〉

- 京都国立博物館編，石塚晴通・赤尾栄慶解題  
『京都国立博物館所蔵 国宝 岩崎本日本書紀』  
京都国立博物館編，石塚晴通・羽田聡解題  
『京都国立博物館所蔵 国宝 吉田本日本書紀』  
京都国立博物館編，石塚晴通・赤尾栄慶解題  
『京都国立博物館所蔵 国宝 浄名玄論』上下巻

本書は、京都国立博物館所蔵の国宝から、岩崎本日本書紀、吉田本日本書紀、浄名玄論を、全編原寸・原色で影印したものである。改題には、石塚晴通（国語学）による訓点の詳解と、赤尾栄慶（古写経学・文化財学）・羽田聡（日本史）による書誌がある。

『岩崎本 日本書紀』は、写本として現存最古で同筆の「推古天皇紀」と「皇極天皇紀」の二巻である。『吉田本 日本書紀』は、卜部家に伝来した『日本書紀』の古写本である。『浄名玄論』は、嘉祥大師吉蔵が『維摩詰所説経』三巻の綱要を述べた書で、日本の元号を用いて書写年代を明らかにした最古の仏典・書跡である。

『岩崎本 日本書紀』は、「刊行にあたって」，「影印 卷二十二」，「影印 卷二十四」，「解説 岩崎本日本書紀 書誌改題（赤尾栄慶）」，「解説 岩崎本日本書紀の訓点（石塚晴通）」。

『吉田本 日本書紀』は、「刊行にあたって」，「影印 神代卷上」，「影印 神代卷下」，「解説 吉田本日本書紀 書誌改題（羽田聡）」，「解説 兼方本（吉田本）吉田本日本書紀の訓点（石塚晴通）」。

『浄名玄論』は、「刊行にあたって」，「影印 上巻（巻一，巻二，巻三，巻四）」，「影印 下巻（巻五，巻六，巻七，巻八）」，「木製旧箱」，「解説 浄名玄論 書誌改題（赤尾栄慶）」，「解説 国宝『浄名玄論』慶雲三年写本の訓点（石塚晴通）」。

（2013年12月25日発行 勉誠出版刊 A3判変形縦組み 120頁 35,000円＋税 ISBN 978-4-585-22071-8）

（2014年2月20日発行 勉誠出版刊 A3判変形縦組み 上192頁・下204頁 100,000円＋税 ISBN 978-4-585-22072-5）

（2014年3月31日発行 勉誠出版刊 A3判変形縦組み 上160頁・下140頁 100,000円＋税 ISBN 978-4-585-22073-2）

金英周著

『名詞句とともに用いられる「こと」の談話機能』

日本語の話し言葉には、「ねえ、ちょっとそこの栓抜きとって」「栓抜き？ああ、これのことか」のように、名詞句に一見なんの意味も持たない「～のこと」が付加された形が頻繁に現れる。本書では、このような名詞句に後続するノコトの働きを、語用論的に「談話における知識管理」の観点から検討し、ノコトは談話において、話し手と聞き手が「知らないこと」と「知っていること」を結びつける際に使用される、知識管理の標識であるという明快な答えを見出した。

なお、本書の内容は博士論文（広島大学、2010年度）を加筆修正したもので、平成25年度科学研究費補助金の交付を受け、ひつじ研究叢書言語編第118巻として刊行された。

「第1章 「名詞句のこと」を巡る問題」、 「第2章 「名詞句のこと」の意味」、 「第3章 「名詞句のこと」と「こと」節の相違」、 「第4章 談話における「名詞句のこと」の機能」、 「第5章 「こと」の意味の拡張と派生」。

(2014年2月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 168頁 4,800円+税 ISBN 978-4-89476-679-2)

高山道代著

『平安期日本語の主体表現と客体表現』

本書は、平安期日本語動詞述語文の主要な格である主語標示および対象語標示の形態についての記述的研究である。名詞と動詞の文法的関係性をあらわす名詞の諸形態の機能と、機能分担の様相についての一端を明らかにしたものである。さらに、名詞句の文法的諸側面について類型学的な観点も取り入れ分析を加えることによって、平安期日本語の主体表現と客体表現の特徴を明らかにし、古代日本語研究への提言を行う。

なお、本書は、博士論文（お茶の水女子大学2003年度）に基づいたもので、平成25年度科学研究費補助金の交付、並びに宇都宮大学国際学部から国際叢書としての助成を受け、ひつじ研究叢書言語編第119巻として刊行された。

「第1章 研究対象としての格」、 「第2章 古代日本語の名詞の格に関する研究」、 「第3章 ハダカ格と有助辞格Ⅰ 主語標示」、 「第4章 ハダカ格と有助辞格Ⅱ 対象語標示」、 「第5章 主体表現と客体表現の対応をめぐって」、 「第6章 主体表現と客体表現の中心と周辺」、 「第7章 有標識形態があらわすもの」。

(2014年2月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 200頁 6,400円+税 ISBN 978-4-89476-680-8)

三樹陽介著

『首都圏方言アクセントの基礎的研究』

本書は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、山梨県のアクセントについての調査研

究をまとめたものである。東京及び東京周辺地域に、広く一体感を持って緩やかに結びついた言語体系が存在するという仮定のもと、この地域で話されている地域言語を「首都圏方言」とし、実態と動態とを把握しつつその特徴を構造的・社会的な視点から分析することで、首都圏方言のアクセントの姿を明らかにすることを目的としている。

なお、本書の内容は博士論文（國學院大學大学院文学研究科、2012年度）を加筆修正し、平成25年度國學院大學課程博士論文出版助成金を得て出版されたものである。

「序章 首都圏方言アクセント研究の射程」, 「第1章 東京方言アクセントに関する研究」, 「第2章 山梨県上野原市方言アクセントに関する研究」, 「第3章 東京周辺諸地域の方言アクセントに関する研究」, 「終章 首都圏方言アクセントの特徴」。

(2014年2月25日発行 おうふう刊 A5判横組み 336頁 11,000円+税 ISBN 978-4-273-03745-1)

湯沢質幸著

『近世儒学韻学と唐音——訓読の中の唐音直読の軌跡——』

儒学が幕府の学問となった近世にスポットを当て、近世と当時の中国音＝「唐音」との歴史的な関係を把握する書。日本独特の漢文の読み方＝「訓読」を背景として、儒学、加えて隣接分野の中国音研究＝「韻学」は、どのように「唐音」を取り扱い消化していったのかを追究する。

「序章」, 「Ⅰ 近世儒学と唐音」は、「第一章 荻生徂徠と唐音」, 「第二章 太宰春台と唐音」, 「第三章 雨森芳洲と唐音」, 「第四章 江村北海と唐音」, 「第五章 平賀中南と唐音」, 「第六章 秋山玉山・村土玉水・原双桂と唐音」, 「結語 儒学と唐音——訓読の中の唐音直読——」。「Ⅱ 唐音以前の韻学」は、「第七章 中世における『韻鏡』清濁と呉音漢音清濁 付論『韻概』の模式図」, 「第八章 近世初期における『韻鏡』清濁と呉音漢音清濁(1)」, 「第九章 近世初期における『韻鏡』清濁と呉音漢音清濁(2)」, 「結語『韻鏡』と呉音漢音の対応」。「Ⅲ 近世韻学と唐音」は、「第一〇章 文雄と唐音」, 「第一一章 富森一斎・泰山蔚と唐音」, 「第一二章 文雄及び利三・利法と唐音 付論富森一斎・泰山蔚における軽重論・助紐音論」, 「結語 唐音利用の韻学」。「終章 近世儒学韻学と唐音——訓読の中の唐音直読の軌跡——」。

(2014年2月25日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 440頁 9,800円+税 ISBN 978-4-585-28012-5)

新屋映子<sup>てるこ</sup>著

『日本語の名詞指向性の研究』

「日本語の表現は日本語話者の事態把握の仕方と深く関係する」という問題意識に基づき、「現代日本語では(略)述語名詞の機能は動詞の領分にも形容詞の領分にも及ぶ」ということに着目して、「名詞としては周辺的な機能である述語としての働き」について論じた既発表論文を見直して一書にまとめたもの。次の4部17章で構成されている。

なお、本書は平成 25 年度桜美林大学学術出版助成を受け、ひつじ研究叢書 言語編第 115 巻として刊行された。

「Ⅰ 述語名詞の機能」は、「第 1 章 日本語の述部における名詞の態様」、「第 2 章 形容詞述語と名詞述語 その近くて遠い関係」、「第 3 章 形容詞派生名詞「～さ」を述語とする文の性質」、「第 4 章 名詞句の性状規定性に関する一考察」、「第 5 章 主体尊敬述語形式「お～だ」をめぐる」、「第 6 章 文末名詞」。「Ⅱ 名詞文の諸相」は、「第 7 章 意味構造から見た平叙文分類の試み」、「第 8 章 ナル表現の内実」、「第 9 章 日本語の無主語文」「第 10 章 随筆の名詞文」、「第 11 章 名詞句独立文をめぐる 意味的な完結性をもたらすもの」、「第 12 章 「という」の介在する連体修飾の意味類型」。「Ⅲ 「状態」をめぐる」は、「第 13 章 総合雑誌に見る名詞「状態」の用法——約 100 年を隔てた 2 誌を比較して——」、「第 14 章 類義語「状況」「状態」の統語的分析——コーパスによる数量的比較——」、「第 15 章 直接引用形式を前項に持つ複合名詞——「～状態」をめぐる——」。「Ⅳ 日本語教育と名詞文」は、「第 16 章 日本語教科書の名詞」、「第 17 章 応答表現「そうです」の意味と用法」。

(2014 年 2 月 27 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 385 頁 6,200 円+税 ISBN 978-4-89476-676-1)

松浦年男著

### 『長崎方言からみた語音調の構造』

本書は長崎方言の語音調（アクセント・トーン）について体系的に記述するものである。2003 年から 2007 年に、長崎県の話者 9 名（高年層 1 名・中年層 5 名・若年層 3 名）を対象に、単語 100 語について、それを埋め込んだ文の発音と単独の語の読み上げを行った調査を分析対象とし、東京方言と比較しながら記述する。長崎方言を音調の類型論の中ではトーンのみを持つ言語と位置づけつつ、形態素が弁別的な情報としてアクセントを持たない言語・方言においても、派生の中間段階ではアクセントがあることを指摘し、長崎方言におけるトーンの記述においてアクセントの情報は有効であることを主張する。

なお、本書の内容は博士論文（九州大学大学院人文科学府、2007 年度）を加筆修正したもので、ひつじ研究叢書言語編第 120 巻として発刊された。

「第 1 章 序論」、「第 2 章 語音調の音響音声学的記述と音声表示」、「第 3 章 外来語の音調現象とアクセント規則」、「第 4 章 複合語の音調現象と境界アクセント」、「第 5 章 音調現象と語彙の指定」、「第 6 章 和語の音調現象」、「第 7 章 語音調の音韻過程」、「まとめと今後の課題」。末尾に、「付録（準備調査 100 語、外来語、複合語、二字漢字、人名、アルファベット関連語彙、アクセント調査票、3 モーラ和語、オノマトペによる各調査結果）」。

(2014 年 2 月 27 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 244 頁 6,800 円+税 ISBN 978-4-89476-681-5)

小倉肇著

## 『続・日本呉音の研究——研究篇・資料篇・索引篇・外編——』全6冊

本書は、日本で作成された仏典の音義書のうち、主要な文献の中から、新訳華嚴經・貞元華嚴經・金光明最勝王經・大般若經の各音義（および字音点）、類聚名義抄諸本の呉音注・和音注などを取り上げ、全ての字音資料を提示するとともに、そこに反映するそれぞれの読誦音・字音を基に、日本呉音（和音）の実態を明らかにするための基礎的な考察を行うものである。資料篇・索引篇では、各文献における日本呉音の字音を經典本文や諸伝本と対照させつつ整理する。前著『日本呉音の研究』（1995年）では『法華經音義』『法華經字音点』についての基礎的な考察を行っており、その続編にあたる。

「第I部 研究篇」は、「I 序説」、「II 続・日本呉音の資料」、「III 中古漢語」、「IV 中古漢語と日本呉音」、「付論」。「第II部 資料篇一（上）」は、「『日本靈異記』『華嚴經音義』『金光明最勝王經音義』掲出字対照表」、「『類聚名義抄』和音注・呉音注対照表」。「第II部 資料篇一（下）」は、「『大般若經字音点・音義』掲出字対照表」。「第II部 資料編二」は、「『日本靈異記』『華嚴經音義』『金光明最勝王經音義』『類聚名義抄』『大般若經字音点・音義』字音対照表」。「第III部 索引」は、「字音注索引 掲出字索引」。「第IV部 外編」は、「『法華經音義』反切音注字音表」。

（2014年2月28日発行 和泉書院刊 A5判横組み 第1巻892頁・第2巻504頁・第3巻1056頁・第4巻544頁・第5巻522頁・第6巻356頁 95,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0700-2）

フロリアン・クルマス著、斎藤伸治訳

## 『文字の言語学——現代文字論入門——』

本書は、文字の定義、世界の文字体系の構造や機能と分類のあり方、文字の変化、文字を使用する人々の心理、社会との関係など、文字に関する言語学的な問題を総合的に論じた、いわば現代の文字論の入門書である。各章の末尾に「課題」が付され、巻末には「付録：文字の見本」として「世界人権宣言」第一条を諸言語の文字で例示するなど、テキストとしての体裁をもつ。原著は、2003年に出版された Florian Coulmás 著 “Writing Systems — An introduction to their linguistic analysis —”（ケンブリッジ大学出版）であり、その日本語訳にあたる。

「日本語版への序文」、「フォントについて」、「第1章 文字とは何か」、「第2章 基本的な選択肢：意味と音」、「第3章 表語文字」、「第4章 音節文字」、「第5章 単音文字」、「第6章 子音と母音」、「第7章 母音記号の結合」、「第8章 分析と解釈」、「第9章 混合文字体系」、「第10章 文字の歴史」、「第11章 文字の心理言語学」、「第12章 文字の社会言語学」、「原注」、「付録：文字の見本」。

（2014年3月1日発行 大修館書店刊 A5判横組み 335頁 2,500円＋税 ISBN 978-4-469-21347-8）

高橋忠彦、高橋久子編著  
『庭訓往来 影印と研究』

編著者架蔵の寛永五年版本の影印、索引、訓読、訳、注釈などを収載。庭訓往来を日本語学の立場から取り上げ、新たな知見を加える書。

本書は、新典社研究叢書 256 として刊行された。

「影印編」は、「高橋蔵寛永五年版本影印」。「索引編」は、「自立語索引」、「漢字索引」。「研究編」は、「訓読」、「現代語訳」、「注釈」、「庭訓往来の語彙と表記」。「付録」として、「東京学芸大学高橋研究室蔵室町期写本影印」を収録する。

(2014年3月4日発行 新典社刊 A5判縦組み 624頁 18,400円+税 ISBN 978-4-7879-4256-2)

小林賢次・小林千草編  
『日本語史の新視点と現代日本語』

古代日本語から近代日本語への史的展開、近・現代日本語の形成、現代日本語文法の機能と表現、そして現代日本語の動態分析と対照研究という四つの視角より、日本語をめぐる諸問題を立体的かつ総合的に捉えた論集。

「第Ⅰ部 古代語から近代語へ」は、「『文法上許容スベキ事項』と日本語史(小林賢次)」、「久松切和漢朗詠集の和歌部分の表記について(中川美和)」、「風カラル考——漢語「薰風」との関連から——(池上尚)」、「程度副詞体系の変遷——高程度を表す副詞を中心に——(田和真紀子)」、「天理本『狂言六義』のテイル・テアルについて(野田高広)」、「狂言台本における副詞「随分」(黄龍夏)」、「狂言台本における例示の副助詞デモ(小林正行)」、「成城大学図書館蔵狂言「悪太郎」の性格と表現(小林千草)」、「翻刻 成城大学図書館蔵狂言「悪太郎」「骨皮」「墨塗」(小林千草ほか)。「第Ⅱ部 近代語の形成」は、「『ガ』・『ケレド』類を構成要素とする接続詞の発達について——近世後期江戸語・明治期東京語における推移——(宮内佐夜香)」、「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現——「お～なさる」系、「～なさる」系、「お～だ」系を中心に——(山田里奈)」、「江戸語から現代語に見られる禁止表現形式の変遷について(中田幸子)」、「『しかし、暑いね』考——聴者の発話理解のための問い合わせ——(梅林博人)」、「近代対訳コーパスにおける日韓の語種構成について——現代語との比較を通して——(張元哉)」、「国語調査委員会編纂『口語法』『口語法別記』の位置づけ——編纂過程と大槻文彦——(田鍋桂子)。「第Ⅲ部 現代日本語の文法と意味」は、「複合形容詞の研究——形容詞+形容詞の構成による場合——(漆谷広樹)」、「『形容詞語基用法』について(近藤研至)」、「現代日本語の非制限的連体修飾節の特性について(大島資生)」、「僅少所要型の時間副詞の意味と用法——「いきなり、だしぬけに、にわか」について——(金英児)」、「談話における対称詞のいわゆる「無助詞」現象——「呼びかけ」の周辺——(荻宿紀子)」、「西日本方言における尊敬形「～テ(ヤ・ジャ・ダ)」の活用(小西いずみ)」、「いわゆる「将然」とは何か

—西日本方言のシヨル形と英語の現在進行形の対照を通じて— (梁井久江)。「第Ⅳ部 現代日本語の動態分析と対照研究」, 「八幡浜方言アクセントについて (清水誠治)」, 「小説における「のである」「のであった」の使い分け—明治・大正期を中心として— (石出靖雄)」, 「談話における「謙遜」の構造と配慮—先行要素・後続要素の調査と「ほめ」との関連性から— (大野敬代)」, 「ブログにおける高年者のカタカナ表記の実態 (土岐留美江)」, 「“すべて”の漢字表記について—改定常用漢字表 音訓の追加と学習漢字への一考察— (高橋永行)」, 「『日本語基本語彙』考—辞典試案としての性格の検討を中心に— (饗場淳子)」, 「日中対照から見た中国語の文末助詞 (井上優・黄麗華)」, 「『V + 着』と『V + テイル』について (時衛国)」, 「日本語と韓国語の条件表現の対照研究—対応する韓国語の形態からみた日本語の形態の意義と働き— (金慶恵)」。

(2014年3月10日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 656頁 13,000円+税 ISBN 978-4-585-28011-8)

高田智和・横山詔一編

### 『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』

2011年9月のNINJALフォーラム「日本語文字・表現の難しさとおもしろさ」(国立国語研究所主催)の講演・報告を各分野の領域から展開し、それぞれ専門的関心により問題点を取り上げて、現代日本語の文字・表現の難しさとおもしろさを明らかにしていく書。

「第一部 日本語と文字・表記」は、「漢字とどうつきあうか (阿辻哲次)」, 「『自由度』こそ日本漢字の魅力 (小駒勝美)」, 「テレビと漢字 (柴田実)」, 「『コーパス』でさぐる和語や漢語のカタカナ表記の実態 (柏野和佳子)」, 「ローマ字表記の基準と実状 (エリク・ロング)」。「第二部 現代社会と文字・表記」は、「文字の認知単位 (横山詔一)」, 「使用場面からみた「略字・俗字」の衰退と個人文字化 (鎌水兼貴)」, 「景観文字研究のこころみ (當山日出夫)」, 「電子メディアの文字・表記 (三宅和子)」。「第三部 教育と文字・表記」は、「学校における表記の非日常性 (棚橋尚子)」, 「日本語学習者の漢字字形の好み (高田智和)」, 「漢字の魅力にひそむエンドレス感と西洋世界の漢字学習「システム」 (シュテファン・カイザー)」。

(2014年3月10日発行 彩流社刊 A5判縦組み 264頁 3,800円+税 ISBN 978-4-7791-1963-7)

山田潔著

### 『抄物語彙語法論考』

主として2008年以後に発表された著者の論文を収録した書。抄物の語彙・語法, 表現, 諺・成句の多岐にわたって, 広範な抄物から収集した豊富な用例によって, 通説に疑義を呈し, 堅実な論証が行われる。

「第一章 清原宣賢講『論語抄』の語彙と語法」, 「第二章 抄物資料による構文の論」,



「三章 抄物資料による表現の論」, 「第四章 『玉塵抄』の諺・成句」。

(2014年3月10日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 404頁 11,000円+税 ISBN 978-4-7924-1430-6)

北原保雄著

『日本語の助動詞——二つの「なり」の物語——』

古代日本語助動詞研究の重大な課題の一つである〈終止なり〉と〈連体なり〉の違いについて解明する書。成立過程, 文法的意味, 語義的意味, 用法など, 多面的に考察を加え, 〈連体なり〉は, 〈体言なり〉とともに, 現代語の「だ」と同様, 日本語の文法の基本に関わる形式動詞であり, 〈終止なり〉とは別語である, と主張する。著者の修士論文をはじめとする「なり」に関わる一連の研究をもとに, 加筆を行ったものである。

「第一章 二つの「なり」について」, 「第二章 〈終止なり〉と〈連体なり〉」, 「第三章 〈終止なり〉の成立」, 「第四章 複述語構文の検証——「らむ」「らし」の成立——」, 「第五章 〈連体なり〉の成立——活用語に接続する「なり」の活用形「なら」と「なれ」——」, 「第六章 「なり」の文法的意味」, 「第七章 〈連体なり〉との相互承接を基準とした助動詞の分類」, 「第八章 〈連体なり〉の連体修飾法欠如」, 「第九章 〈終止なり〉〈連体なり〉の変容——平家物語の場合——」。

(2014年3月20日発行 大修館書店刊 A5判縦組み 256頁 2,900円+税 ISBN 978-4-469-22234-0)

亀井秀雄著

『日本人の「翻訳」——言語資本の形成をめぐる——』

本書は, 幕末から明治期にかけての日本語が, 「翻訳」によって人々の言語意識に影響を与えながら変化していく姿を, 言文一致運動との関係を捉えつつ, 描く。英語教科書, 横浜方言や商業用語などの日本語辞典や教科書, 日本語文法書や発音の教科書, 文学作品, 国内外の手記・旅行記や自伝などから事例をあげながら, 「翻訳」をめぐる日本語のさまざまな側面を取り上げる。

なお, 本書は岩波書店『新日本古典文学大系明治編』の月報に連載された「明治期の翻訳における言語・文化」28回分をまとめたものである。

「はじめに」, 「一章 想像のアメリカ言葉」, 「二章 ヨコハマ雑種 (ハイブリッド) 語」, 「三章 異国ことば」, 「四章 ことばと世界」, 「五章 命がけ/命取りの英語」, 「六章 異国の人別 (にんべつ) にて終らんも本意ならず」, 「七章 ハジマリニ カシコイモノゴザル」, 「八章 First Teacher of English in Japan」, 「九章 やわらげ, 訳 (ウツ) す」, 「十章 音 (コエ) の領略」, 「十一章 日本語の輪郭が見えない状況のなかで」, 「十二章 見えてきた日本語の輪郭」, 「十三章 翻訳における口語の位置」, 「十四章 スタンダードな日本口語を求めて」, 「十五章 メタ言語との出会い」, 「十六章 江戸口語の突出」, 「十七章 記号への関心」, 「十八章 記号の修辞法」, 「十九章 翻訳行為のテク



スト],「二十章 纂訳補述という方法」,「二十一章 速記本における「訳」と文体」,「二十二章 通俗版の面白さ」,「二十三章 西洋人における直訳と翻訳」,「二十四章 形式の翻訳と意訳」,「二十五章 詩的表現への開眼」,「二十六章 音調への注目」,「二十七章 翻訳行為の翻訳」,「二十八章 直訳と等価交換」。

(2014年3月25日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 386頁 3,000円+税 ISBN 978-4-00-025956-9)

野村眞木夫著

『スタイルとしての人称——現代小説の人称空間——』

人称表現に着目し、その観点からテキストを類型化しながら、テキストのスタイルを分析的に取り出すことを目的とする書。1人称小説・2人称小説・3人称小説を等しく検討の対象とし、小説の人称空間と呼ぶべき範疇を見出す。

「Ⅰ 本書の目的と問題の所在」,「Ⅱ 人称をどのように理解するか」,「Ⅲ 日本語の人称制限の現象とその理解の方法」,「Ⅳ 人称の観点からとらえる文学テキスト」,「Ⅴ 日本語の2人称小説における表現の特性と語りかた」,「Ⅵ 文学テキストにおける人称空間とのコミュニケーション」。

(2014年3月25日発行 おうふう刊 A5判横組み 224頁 2,500円+税 ISBN 978-4-273-03753-6)

浅田秀子著

『敬語の原理及び発展の研究』

日本における敬語の起源と意義(=原理)について学問的に考察した書。日本人の宗教観と日本語における遠隔表現のしかたから、敬語表現の発生・起源を考察し、現代日本語の待遇表現の基本原則や特徴的現象を述べ、敬語に用いられる個別の文法表現や挨拶行動での待遇表現を具体的に解説する。

「序説 敬語の原理の解明があるべき社会の創造に結びつく」,「総論 第一部 敬語の原理——敬意表現の起源と意義について——」は、「第一章 日本人の世界認識の前提」,「第二章 敬意表現の起源——遠隔表現～ウタ～敬語——」,「第三章 敬語の意義と効用」,「第四章 階級遵守語」,「第五章 礼儀語と自己品位語」,「第六章 日本語の敬語の意義」。「総論 第二部 現代の待遇表現の構造と実態」は、「第一章 現代の待遇表現の構造」,「第二章 日本人の関係認識と待遇表現——ウチ・ソト・ヨソ認識——」,「第三章 現代の待遇表現の方法」,「第四章 国語政策の当否」,「第五章 日本社会と敬語の未来」。「各論 第一部 現代の待遇表現の特徴」は、「第一章 基本原則」,「第二章 現代の待遇表現に特徴的な現象」,「第三章 敬意の段階」。「各論 第二部 現代の待遇表現の種類」は、「第一章 敬語に用いられる文法表現」,「第二章 肯定・否定の応答、「問い直し」「納得」の表現」,「第三章 動作に用いられる個別敬意表現」,「第四章 挨拶行動での待遇表現」。「日本文化の特徴が表れている敬語関連の用語集」。

国語語彙史研究会編  
『国語語彙史の研究 33』

国語語彙史研究の体系化と共に、語彙史研究の新たな方法論や隣接分野との関わりにも積極的に取り組んだ論文集。小特集はメディアと語彙。

〔小特集—メディアと語彙〕は、「メディアとしての平安和文—会話文の「話しことばらしさ」をめぐって—（西田隆政）」、「古本節用集の対利用者意識・試論（佐藤貴裕）」、「漢語辞書とメディア（今野真二）」、「『三省堂国語辞典』初期の版で項目はどのように決まったか（飯間浩明）」、「近代的メディアの字音語ルビ—幕末・維新期のルビと文章形態の対応関係—（井口佳重）」。「ヒ〔日〕・ヨ〔夜〕、アサ〔朝〕・ユフ〔夕〕（蜂矢真郷）」、「『経・緯』と方角（吉野政治）」、「形容詞から見た中古散文二二作品のグループ化についての試み（村田菜穂子・前川武）」、「枕草子の語彙—章段分類に注目して—（富士池優美）」、「動詞「めかす」の成立（村山実和子）」、「字鏡集と倭玉篇の境界と継承に就いて（鈴木功真）」、「『じょうだん』（常談・冗談）の語史（山内洋一郎）」、「漢語の再解釈—「泥酔」と「ドロロン」の関わりを例として—（鳴海伸一）」、「『航米日録』の人間に関する漢語語彙—中国地理学書等との比較—（浅野敏彦）」、「『赤い鳥』の童話作品における〈父〉〈母〉を表す名詞のバリエーション（山田実樹）」、「『和蘭字彙』に見られない『英和対訳袖珍辞書』初版の訳語—その2：Medhurst 英華字典の訳語に改変を加えている訳語—（櫻井豪人）」、「『近日』の語誌（山際彰）」、「語彙の類似と偏り（田中章夫）」。

(2014年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 320頁 9,000円+税 ISBN 978-4-7576-0706-4)

金澤裕之編

『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』

本書は、独自に開発・作成した「YNU 書き言葉コーパス」について、解説、評価・分析、論文を掲載し、付属 CD-ROM に「YNU 書き言葉コーパス」を収録したものである。

「YNU 書き言葉コーパス」は、日本人大学生 30 名と留学生 60 名（韓国語母語話者、中国語母語話者各 30 名）に対し、12 種類のタスクを課すことによって得た計 1080 編の手書きの作文を電子化し、3 つのレベル別、12 のタスク別に分類しながら、コーパスの形にまとめたものである。(i) レイティング付きの、(ii) ある程度多数の日本語母語話者と非母語話者による、(iii) 各種の書き言葉資料を集めた点に特徴があり、忠実にテキスト化したオリジナルデータと、それを補正したデータがある。これらのデータに基づいた研究論文 8 本を収録する。

「序」, 「本書の構成」。「第 1 部 「YNU 書き言葉コーパス」について」は、「1 はじ

めに]、「2 タスクについて」、「3 調査について」、「4 評価について」、「5 非母語話者の評価結果」、「6 まとめ」。「第Ⅱ部 評価・分析編」は、「タスク1~12」、「第Ⅱ部のまとめ」。「第Ⅲ部 論文編」は、「『YNU書き言葉コーパス』における日本語非母語話者の接続詞の使用——「そして」の多用に注目して——（金蘭美）」、「語彙調査に基づくタスクの分類——「語彙多様性」と「個人差」の観点から——（橋本直幸）」、「日本語母語話者及び非母語話者の文内部における丁寧表現の運用の実態（嵐洋子）」、「韓国語母語話者における動詞変化構文の使用状況——母語の感覚に合う記述のために——（植松容子）」、「『励まし』の手紙文における文末文体の混用——ダ体の混用に着目して——（奥野由紀子）」、「伝達表現と談話——『YNU書き言葉コーパス』のタスク8に見られる伝達表現——（金庭久美子）」、「『母語話者レベル』のL2能力に関する一考察——『YNU書き言葉コーパス』の「超」上級日本語学習者を対象に——（西川朋美）」、「手書き作文に見られる漢字表記の誤りについて——「貸す」と「借りる」の混同に注目して——（金庭久美子）」。CD-ROM付き。

（2014年3月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 448頁 6,500円+税 ISBN 978-4-89476-698-3）

沼本克明著

『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず  
——字音仮名遣い入門——』

字音研究の入門書として、歴史的仮名遣いとしての「字音仮名遣い」は帰納法と演繹法とのはざまに揺れ動いているという事実を指摘し、字音仮名遣いの今後の方向について述べる書である。

和語の「歴史的仮名遣い」は、古代文献に仮名書きの用例が存在していることが決定の条件であり、徹底した帰納法で決定される。一方、漢字については、数万字存する漢字のごく一部分しか、古代文献の実例による字音形を示すことができない。字音仮名遣いの発議者であった本居宣長をはじめとする江戸時代の国学者達は、その当時流行していた『韻鏡』に基づく演繹法によって実例の欠落部分を補った。字音仮名遣いは、帰納法に基づきながらも、演繹法に拠らざるを得ない。演繹法の基盤となる中国の『韻鏡』の音韻体系と、日本漢字音としての呉音・漢音の背景となった音韻体系の食い違い、といった基本的な問題を、日本漢字音の歴史的研究の立場から捉える。

「導入論 和語の歴史的仮名遣いと字音の歴史的仮名遣い」、「第一章 中国漢字音と日本漢字音」、「第二章 宣長大人の『字音仮字用格』」、「第三章 呉音と字音仮名遣い」、「第四章 漢音と字音仮名遣い」、「第五章 字音仮名遣いの周辺」。

（2014年4月25日発行 汲古書院刊 B6判縦組み 324頁 3,000円+税 ISBN 978-4-7629-3614-2）

今野真二著

『日本語学講座 第8巻 自筆原稿』

単独著者による全10巻予定の講座の第8巻「自筆原稿」。森鷗外，夏目漱石，鈴木三重吉，有馬生馬，宮澤賢治，中島敦，井上究一郎などの自筆原稿及び日夏耿之介の自筆校正紙などを採り上げ，それぞれが書かれた時期の日本語に関わる知見を引き出す。

「第一章 室町期の文献——冷泉為広の草稿類を例として——」，「第二章 現代日本語」，「第三章 明治期の日本語を素材にして」，「第四章 大正期の日本語」，「第五章 韻文」。

(2014年5月20日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 248頁 3,500円+税 ISBN 978-4-7924-1010-0)